

# 備えあれば，憂いなし

前総務課長 佐藤 龍之助

一般的に言いつくされている諺ではあるが，なかなか備えをしていないのが現状である。テレビ等で災害の報道がなされるたびに思い起こされるものの普段はよそごとのように薄れてしまっている。

阪神大震災で私が体験したことを述べてみよう。

激震当日の私は，交通の遮断を克服してタクシーで職場に駆けつけた。附属病院の外来棟正面玄関の自動ドアは地面の押し上げで扉が作動しなかった。急いで救急部の入口に回ってみると救急車が1台横付けになっており，受付窓口にはストレッチャーに乗せられた患者さんとその他に2～3人患者が並んでいた。ドクター，ナースが5～6人付き添って深刻な表情で対応していた。まだ被災患者は少なく慌ただしさはみられなかった。廊下，階段を通過して3階の総務課室に着いて扉を開けると室内にはまだ誰もいなかった。室内は机，椅子が元の場所から移動しており，ロッカーのガラス戸は割れ落ちて中の資料類が散乱し，小ロッカー数台が倒れていて，足の踏み場もない状態であった。何とか室内を通過して自室を開けると同じ状態でデスクに座ることもできなかった。とても片付ける気にもなれず，隣の管理課室を覗くと施設担当の者が2～3人いたが，室内は総務課室と同じ状態で散乱していた。

立ち話をしていると救急車のサイレンがひっきりなしに聞こえてくる。急いで救急部に戻ったところ，受付では畳に乗せられた被災患者など5～6人が既に列をなしていた。その後次から次からと運び込まれてくる患者をストレッチャーやタンカに乗せる若手のドクター，ナース等で救急部はごったかえしていた。事務部次長も駆けつけていたので，事務部での対応並びに救急対策本部の設置などの打ち合わせをする間も，とにかく人手が足りないので私達も患者をストレッチャーなどに乗せて運ぶなどの手伝いをした。また，DOAの仮安置所を設けるなど遺体安置の補助業務にも当たった。10時頃には受付が間に合わなくなり，一刻を争うため居合わせた者で臨時の受付場所を増設して対応に当たった。その頃には病院長を本部長とする救急対策本部が設置された。次長と私は終日救急部，執務室，救急対策本部と駆け回り，当面の事務処理に当たった。

対策本部会議で全診療科等で救急部を全面的に協力する体制が整えられた。私達は設置された救急部の待合所，廊下に仮設ベッドを作るなど，同じ業務が2～3日続いた。不眠不休の救護体制が採られ，早朝あるいは夜遅くまでの打ち合せ会議が毎日続いた。1月26日から全診療科の外来診療が再開され，日に日に平静さを取り戻していった。

次に，このような体験から私が痛感したことを述べてみよう。

1に，感じたことは，いち早く職場に連絡するか駆けつけると言う気持ちが大切である。

のことはお互いの安否の確認はもとより一刻も早い対応が可能となり被害を最小限に止めると共に難を救うことになるからである。

2に、広域大災害を想定した救護活動マニュアル（危機対策）の策定である。このことはいち早く駆けつけたものの何をしていたのか、ただ混乱するのみで有効な活動につながらなかった苦い経験からである。

3に、救護・支援活動には不眠・不休の対応が求められることから、健康管理（精神面のカウンセリングを含めた）対策である。

4に、情報の収集・提供である（マニュアル化）。最も有効な手段として、事前に各セッション毎に写真・記録班などの班編成をしておくことが、後々のまとめに役立てることができるからである。

5に、指揮命令系統「陣頭指揮者」の複数化である。単一の指揮者では当人も被災することもあるのでマニュアルの策定に当っては複数者を想定しておくことが肝腎である。

6に、常日頃から各部署（所）の点検と掌握である。私自身が反省をしていることであるが、所掌範囲等を全域に渡ってできる限り詳細に掌握をしておくことが大切である。

7に、報告、連絡、相談である。特に緊急時には気が動転し、多忙に紛れ報告等を失念して、全てに悪影響をきたす事態を招く恐れがあるので忘れてはならない。

8に、余震の対応である。病棟・診療棟等がかなりの被害を被った場合、入院患者の恐怖と不安は計り知れない。そこで先ず病棟の安全（度）性について良く理解してもらい、安心感を与えるなど余震に対する対応が必要である。

9に、人的支援・ボランティアへの対応策である。各層からの支援あるいはボランティア協力の申し出を受けたが支援活動の範囲、手順が定まっていながために、かえって彼等の心情を害することがある。

10に、全学的支援、協力体制の確保である。

この他当然申し上げるまでもなく、医療機関にとっては水を初めとするライフラインの確保対策、医薬品を初め医療を支える物資の備蓄は必須の対策であると痛感した次第である。

最後になりましたが、関係各位からの心温まる激励と文部省を初め各大学からの絶大なるご支援ご協力をいただいたことに心から感謝している次第であります。

# 小さく、強い存在一人間

前管理課長 谷川 成美

1月17日の地震から半年余が経過したが、地震への恐怖感が体に染みついている。風で窓が鳴っても、大型車が通っても、あっ地震と思ってしまう。東京に来て感じたのは、本当に神戸で地震があったのだろうかと思うくらい周囲の人達はそのことを口にしないということである。多少淋しい気もする。しかし、それはやむを得ないことなのだろう。私も奥尻島の地震の時はTVの中での出来ごとのように感じていた。神戸から転勤して来たと言うと、しばしば阪神大震災のことを聞かれる。自分の説明の拙さもあってか、なかなか実感してもらえないのが分かってからは話すことを止めた。決して拗ねている訳ではない。実体験していない人にいくら話をしても分からないだろうし、却って震災で廃墟同然となった神戸の惨状を思い出し、こちらが辛くなってしまふからである。

あの日、私は妻の「キャー」という怯えた悲鳴と同時に、妻の上に覆いかぶさり、激しい揺れが収まるのをただじっと待つしかなかった。命は天に委ねて。揺れが一旦収まってから真っ暗な中、枕元の眼鏡を捜した。不思議なことに筆筒、本棚などが倒れて山のようになった下から傷ひとつなく出てきた。次は、周囲の情報を得るべく、懐中電灯と携帯ラジオを取りに行こうと、まず靴下を探して2枚重ねにしてスリッパを履いた。食器や食物が散乱したなかでやっと見つけた懐中電灯だったが、電池の数が不足していた。

クリスマス用の蠟燭を探し出して火をつけ、室内を見ると、啞然としてしまった。食器棚やサイドボードが倒れ、玄関に通じるドアを塞いでいる。食器、ガラス扉が木っ端微塵に割れ、置物、本が散乱し、文字通り足の踏み場もない状況である。食器類は流しにあったものしか助かっている。天井の電灯は笠が飛び、蛍光管が割れてその破片が筆筒から飛び出した引出しの衣類の上に散乱している。寝室でも筆筒や本箱が私の布団の上に折り重なるように倒れている。妻をかばって妻に助けられた。ラジオを付けると「関西地方に地震があったようで花瓶などが倒れたところもあるようです。」などと呑気なことを放送している。

ベランダへ出て更に愕然とした。西も東も炎で赤く染まっている。何ということだ。我が宿舎は神戸海洋気象台南側の高台にあり、我が家が3階ということもあって、東は三宮から西は兵庫区、長田区まで良く見える。神戸大学医学部・病院の建物も通常は良く見えるが、火災の煙で良く見えない。妻が呆然としているのを励まして、余震に備えて少し片付けようとしたが、あまりの酷さにどこから手を付けてよいのか分からない。この間強い余震が何度も襲ってきて、心臓の動機がますます強くなる。

ドアに寄り掛かった食器棚を起こして、自転車で医学部へ向かった。民家が倒壊して道を塞ぎ、道路はひび割れ、波打ち、電線は切れて垂れ下がっている。

事務系職員も数えるほどしか出勤していない。まず、救急部へ行く。そこは阿鼻叫喚の世界であった。家屋の下敷きになったり、火災に遭った人々が救急車、自家用車などで、なかには畳に乗せられて、間断なく運ばれてくる。家族は泣き叫び、遺体はどんどん増え、凄まじい光景を呈している。病院建物自体の被害は比較的少なく、とりあえず被災患者への対応を最優先し、患者の搬送や医療器具、バケツ水の運搬等を行う。これから先いつまでかかるか分からない被害状況の把握、復旧作業を思うと気が遠くなりそうであった。

その後の各被害への対応、病院機能の維持については、別途詳細に執筆されるので割愛させて頂き、今回の地震時に私が感じたことを数点記すこととする。

まず第1にリーダーの確保である。これは今回の地震発生当日からその必要性を強く感じた。幸い救急部長をトップに事務部次長、看護部長が地震発生直後から陣頭指揮を取り、皆気が動転している極めて特異な事態であったが、まとまりのある対応ができたと思われる。軍隊にもハンモック・ルールというのがあって、指揮官に代わり、指揮を取る者が順次末端まで決まっているそうである。災害時においても同じと思う。

第2にリーダーのもと情報交換の場を設けるということである。神戸大学病院でも地震の翌日から毎朝各診療部門等の者が集まり、現在どこまで対応が可能か、何が不足しているか、今後の見通しはどうか、などを報告、協議し「病院としてその日1日どのような医療を提供するか。」ということを決定していった。

第3は通信手段の確保である。交通手段が遮断され、電話も殆ど通じず、幹部職員や関連病院等との連絡も思うように取れず苦慮した。現実的にどのような方法が適切か分からないが、長距離通信が可能なトランシーバーのようなものがあれば予め備え付けておけば良いのかもしれない。

第4は震災後、国会質問にも出たが、有毒物資や危険薬品等の保管の問題である。今回の地震で保管庫や棚が殆ど倒れ、瓶類等が破損した。幸い、有毒ガスや火災が発生するようなことはなかったが、今後課題を残した。また、実験動物についても、今回は飼育施設外に逃亡した例はなかったものの、その収容にも多大な労力を要し、災害時を視野に入れた管理方法が必要と思われる。

第5はファシリティの関係である。大学病院には独自のドクターカーやヘリコプターの確保ができるシステムが必要であると感じた。緊急時に他の行政機関等に要請しないと動けないという立場では主導的な医療の提供はできない。一刻を争う人命に係わる問題である。また、ライフラインが途絶しているなか単独で稼働可能な設備の用意も必要である。

以上5点を取り上げたが、他にもマンパワーの確保など今後考慮すべきことが多く残されていると思う。

今回の震災を経験して改めて知らされたことは人間も自然界の小さな一存在に過ぎないということである。私は宇宙の壮大さが好きで関心もあるが、宇宙ではなく地球規模で見ても今回の地震は地殻のごく小さな変動である。それによる人間界の損害の何と大きなことか。自然の

脅威をまざまざと見せられた。何とか今日まで復興してきたのも、文部省及び各大学からの絶大なる支援、医学部職員の献身的努力の結果と、改めて感謝するとともに敬意を表したい。震災時には、普段と違って人の優しさが胸に深く突き刺さり、大学病院指導室長、第三予算班主査等の温かい言葉に涙が滲んだりした。また、神戸の街の人々も不思議なくらい皆優しかった。周囲への優しさは、街全体を皆で復興しようという決意と、自然の脅威に屈しない人間の強靱さの根源である。

# 尼崎より4つの「痛勤」物語

学務課大学院学生掛長 山中昌昭

**その1話** 初めて甲子園から三宮にバスが開通した。バスは和歌山からきたデラックスバス、しかしながら乗るのに3時間の行列。なにしろトイレだけは気を付けて、前日から水を控えて、しかも神戸まで何時間かかるかわからない恐怖のバスである。

そんなバスの中で、あの高速が倒れている東灘にはいると運転手と助手の会話、助手が運転手に聞いた「こんなになってどうして修理するんですかね。」運転手いわく「アロンアルファでくっつけたらすぐやないか。簡単な修理やで」乗客一同大バクショウ。

**その2話** 芦屋から三宮へのバスが開通して少し経ったある日、芦屋のバス停には、各駅とノンストップの2つができていた。いつものように2時間程並んでバスに乗った。

それからが大変だった。山口県からきたバスの運転手が、こともあろうか、各停車とノンストップのバス停を間違えてしまった。しばらく乗客はだれも気が付かなかった。バスは2号線から、山手幹線に入っていった。いつもは43号線で三宮へ行く筈である。

ところが、山手幹線の住吉のバス停で停まってしまった。さあ大変である。バスの中は大混乱となった。「コラ運転手何処へいくんや」「このバス、ノンストップと違うんか」「早く43号線へ行ってよ」

さらに、住吉で待っていた人が乗ろうとすると、乗客から「こら乗せるな」「三宮へすぐ行け」若い運転手が、すぐ後ろにいた私に小声で「お客さん43号線はどこにあるんですか」この日はあいにく、王子公園付近で大渋滞、仕方なく王子公園から大学病院まで歩くはめになった。

**その3話** 大学病院から三宮のバス停まで歩くのはなれてきたが、元町や三宮は夜は真っ暗、その日遅かったので1時間程でバスに乗れた、これで2時間で芦屋に着くと勝手に決めてしまった。

バスに乗った人達は座ってもうぐったりとして、私も少し寝ていた。ところが1時間半ぐらいいしてから、一人の乗客が大声で叫んだ「運転手さん、大変や！、ここは西宮やで芦屋はとっくに過ぎてるで」運転手もびっくりして「すぐ引き返しますわ」ところがである、西宮から芦屋まではバスレーンはない。バスは下りの渋滞の中、芦屋へ着いたのはまたそこから1時間以上かかってしまった。運転手は降りる乗客一人一人に「すいません、すいません」の繰り返しで、乗客は「ええかげんにしいや」

**その4話** JR住吉駅から阪急御影駅まで歩き、そこから王子公園駅まで、さらにJR灘駅ま

で歩いてそして神戸駅まで、しかしこの「痛勤」はなんとか時間を計算して通えるようになったことは大きな救いでもあった。

その2日後ぐらいの出来事。特に月曜日はなぜだか大変な人である。なんとかして御影駅で乗って王子公園駅に着いた。しかし駅のホームから出られない、ホームにまだたくさんの人がいるのに、次の電車が来て、またもや大混乱。

階段では、乗る人、降りる人で身動きできない状況である。駅員はマイクで叫ぶだけ、「押さないようお願いします」「乗る人の通路を開けて下さいお願いします」「ご協力をお願いします」これを繰り返すばかりで降りられない。

その時乗客の一人が大混乱の中で叫んだ。「こらおまえらはご協力のお願いばかりで、何もしとらんやないか」「何を協力するかはっきり言わんか」まわりの客もたまりかねて「そやそや何とかせんか」。その時駅員は一段とマイクで大声で言った「皆様どうかケガのないようご協力をお願いします」

# FOOT PRINTS

前総務課職員掛員 山本浩嗣

平成7年1月17日朝、地震の小さな揺れに目を覚ました。揺れは次第に大きくなっていったが、別に驚きもしなかった。食器棚や米櫃がガタンガタンと倒れて行く中、「えらい大っきな地震やなあ。楽器潰れるんちゃうやろなあ？」と思っていた。揺れが止まった後、足を切らないように靴を履き、瓦礫の上を歩き回って楽器の無事を確認した。お気に入りの萩焼の湯呑みは偶然にもフキンに包まれた状態になり割れていなかった。

次に、知人を助けだそうと家を出た。周囲はまだ火事も起こってなかったのでそれ程被害もないのだろうと思っていた。家に着くと、なんと寝ていた。大物だった。「凄い揺れやったなあ。」と寝ぼけた声で言った。これは役に立たんとガスの元栓を締め、ドアにツメをして少し開けた状態にし、ラジオをつけてから自分の家に向かった。

戻ってみると、お隣りさん達がガヤガヤと騒いでいた。どうやら外に出て来ない僕が生き埋めになっていると思っていたらしかった。僕の無事を確認すると、まだ出てこない2階のおばあちゃんをみんなで救出し始めた。窓からカギを落としてもらい、外からドアを開け、瓦礫を掻き寄せつつ救出した。

一段落して、家に入ってラジオを聞きながら、ふと、「病院行かなあかんのやろか」と考えていた時、窓の外からカツンカツンと靴の底が鳴る音が聞こえてきた。慌てて外を見て見ると、何もなかったかのようにスーツ姿のサラリーマンが数人歩いて行った。それを見て、「やっぱり行かなあかんのや。」と着替えて慌てて出かけた。

途中、異人館の風見鶏は大丈夫かなあ？とか考えつつ、辺りを無造作に転がっている瓦礫を避けて走った。

病院に着くやいなや課長に呼び止められた。最初の仕事は二人のこどもを亡くした女性の身寄探しであった。取り敢えず泣きまくる彼女から実家（室蘭）の電話番号を聞き出し連絡してみた。運悪く留守電であった。要件を録音した後、彼女の家近くに行き知人を探すことになった。燃え狂う湊川周辺を原付で走り回った。いつもなら通れた道も瓦礫で通れなかった。教えてもらった付近は酷く崩れていたため、周囲にいた人に聞いてみると、どうやら近くの小学校にみんな避難しているらしいことが分かった。その小学校に行き、校庭にいる避難住民に一人一人尋ねていくと、ようやく一人の女性を捜し出すことができた。訳を説明し後から来てもらえるようお願いした。

病院に帰ると、救急患者の群だった。次々に運び込まれる患者のために廊下は血塗れだった。至る所に人が蹲ったり寝転がっていた。ベットが足りないので長椅子で賄った。また、遺体の安置場が足りなくなったので会議室の机を持って降りた。毛布に包まれた遺体を机から机に移

し変えたりもした。空腹であることも忘れて働いた。しばらくして食料が届いた。パンと牛乳だった気がする。数少ない食料を病院内の患者・避難住民に配った。しかし、動くこともできない人もいる中を、ここぞとばかりに食料に群がる人達がいたことは許せなかった。そんな中、最初の一日が暮れていった。

夜も眠れぬ忙しさだった。2～3日ろくに寝れなかった。夜も治療を受けにくる被災者の数は減らなかった。病院の周囲は燃え続け、夜もどこか明るい感じがした

3日目に初めて実家に連絡した。祖父は、今にも自転車に乗って神戸まで走りだしそうだったらしい。その際、大学時代の部活の後輩が死んだことを知った。よく一緒に練習していた。後輩のなかでは、一番僕に似た吹きかたをしていた。将来有望なトランペッターだったが、木造住宅の1階に下宿していたため押し潰されたらしい。手には、地震直後に吸ったとみられるタバコを持ったままだった。瓦礫の中からは遺品と一緒に僕が貸していたトランペットも見つけられたそうである。しかし、そのことに悲しんでいられなかったし、突然のことで実感も沸かなかった。取り敢えず目の前のことについて考える位しかできなかった。3月に入って静岡へ墓参りに行ったときに初めて彼の死を認識した。

くる日もくる日も患者の対応ばかりだった。度重なる余震と火災のために病院の周囲は荒れて行く一方であった。地震当初から働き詰めの先生達も疲れが溜ったのか、風邪をひく人が増えてきた。全国のマスコミからも状況を説明して欲しいと電話がたて続けに入るようになった。「電話はいいから、助けに来い。」内心そう思いながら取り次いだ。カナダのテレビ局からも電話があった。生中継だから英語の達者な人を出してくれと言われた。やっぱり英語は難しかった。

何日目であったろうか。雨の日があった。ニュースステーションの取材も来た本山第二小学校に友人が避難しているらしいという噂が耳に入った。慌てて探しに行ったが見つめることができなかつた。実家（山口県）に電話してみると、就職先に避難していることがわかった。次に三宮に住むバンド仲間を探しに行った。家の留守電には、「〇〇です。無事です。」と入っていたが、「どこで無事やねん。」そう思いながら家に行った。家には居なかつたので実家（岡山県）に電話してみると、2号線をヒッチハイクしながら帰ってきたらしかった。取り敢えず無事を確認出来たので安心した。

さて、地獄に蹴落とされた人間には感心させられる時もあった。お互い助け合い、この地震を乗り越えて行こうとしていた。見てるだけでも嬉しかった。患者の対応にも何か充実したものを感じた。ところがどうであろうか、3～4日もすると人間は自分の欲望を剥き出しにすることもあった。まるで自分だけが被害者であるかのように振るまう者も出てきた。人間の嫌な部分を見ている気がして堪らなかつた。

そんな中、1月23日頃から事務室にも人が増えた。何とも言えない嬉しさを感じた。また今日も頑張ろう、そう思いながら毎日働いた。よく食べた。何もなくなった神戸の中で僕の体重だけが8kg増えた。

# 震災当日の医事当直を顧みて

前管理課用度第二掛長 江 角 義 雄

まず始めに、今回の出来事は未だかつて経験したことのない、また、起こり得るはずもない予想外の大惨事であり未曾有の大地震であったことから、記録（報告）としては、数値・時間経過等も判然としない不十分なものであることをお断りして、思いつくままに記述させていただきます。

平成7年1月17日未明、中央診療棟1F医事当直室の床の中で左右の激しい揺れに目を覚ます。壁・天井と室全体が揺れており“地震が来た”と直感した。

しかし、過去の地震と違い何時まで経っても強烈な揺れが止らない。“エエ加減ニセンカイ”と頭の中で叫ぶ。暫くしてやっと揺れがおさまる。非常電源が稼働したのか天井埋め込みの非常灯（白熱球）が点灯しており、当直室を見渡すも幸いこれといった被害はなかった。この数分後、内線電話等により救急部処置室の薬品庫・病棟什器類の倒壊及び防火扉の閉鎖が判明した。懐中電灯を手にし病棟階段を駆け上り、順次、防火扉を解放していった。9F・10Fの床は水浸しとなっており、また、10Fは廊下部分に白い煙（蒸気；後で分かったことだが）が胸のあたりから天井にかけて立ち込めており異様な光景に思わず腰を丸めて煙の下を歩いた。

しかし、この時点に至ってもこの地震により兵庫県南部全域において家屋の倒壊等甚大な被害を被っているとは想像だにできなかった。地震発生後20分を経過した頃だろうか、次から次へと患者（落下物・建物等の下敷きになり血まみれになった負傷者）が、パトカー・通りすがりのマイカーにより運ばれて来た（救急車による搬送が始まったのは、午前10時以降だったように思う）。患者の付き添いもなく、一時に多数の患者を受け入れたこのような状況では、迅速な診療・治療を第一と考え、まず医師に見てもらうこととし、受付（住所・氏名等の確認）は後回しとした。救急部前から中央放射線部にかけて廊下に座り込んでいる患者のために、外来廊下・待合室の長椅子を運んできて、仮の処置台等にしてもらったが、患者の数に比して医療スタッフの数は余りにも少なく、重症患者から順番に廊下で処置する様は、まさにTV・映画で観る野戦病院の体であった。（助けを求める患者を目の前にして何の手助けもできない。この時程自分の無能力・無知を思い知れされたことはなかった。）。

また、患者はこの混乱の中、恐怖心・不安感並びに傷の痛みにも身を震わせウメキ声を上げているもののじっと我慢をし、受付窓口にて診察申込書に記入し、併せて保険証を持参していない旨を告げる等、整然と診察の順番を待っていたのには例え様のない感動を覚えた。

地震発生後1時間を経過した頃、9F病棟詰所だと思うが「入院患者の不安を取り除くために病棟から避難したい」と避難場所について照会があり、「地震もおさまり時間も経っていることからそのまま病棟に待機するか、どうしても避難する必要があるなら外来1Fホールはど

うか」と回答した。

午前9時を過ぎた頃かあ、医療スタッフが駆け付け1F各科外来診療室において治療が開始され、救急部前の廊下での処置を取り止めた。また、時を同じく事務職員も出勤してきて、少ない員数ではあるが被災患者に対する対応（治療業務及び受付手続等）が可能となった。受付患者の氏名一覧表を手書きにより作成し窓口に張り、来院した家族・身内に提示したのもこの内の対応の一つであった。当日の震災による受付患者は、午後5時現在で300名を超え、死亡患者は20数名であったと記憶している。

余談になるが、地震発生後40分を経過した頃と、その約1時間後の2回にわたり共同通信から電話が入り、地震の被害状況及び患者の怪我の状況等について執拗な取材があり、多数の負傷者を受入れている緊急時の最中、この対応にはほとんど閉口した。後日、今回の地震の初期活動の遅れが新聞紙上等で取沙汰にされ問題となっていたが、いかに緊急時であったとはいえ、私のマスコミ嫌いの性もあり情報の提供が少なかったかと、少々反省もしているところである。

最後になりましたが、一日も早い、この神戸の復興を祈念して筆を置きます。

# 栄養管理室の力

医事課栄養管理室長 土江節子

私の家は、JR山陽線大久保駅の北3kmに所在している。「ガチャン」という音と同時に、おなかの上に額、人形ケースが落下した。咄嗟に飛び起き、倒壊の家具の中から電話を探し、病院に電話をした。長年の病院栄養士生活により、身に付いた無意識の行動で、1分もかからなかった。栄養管理室の職員は、すでに3名が出勤していた。「電気が消え真っ暗。エレベータ等電気器具は使用できない。水はでない。ガスの匂いが充満している。棚は倒壊し、朝食に予定していた果物が散乱している。」とのことであった。この時、非常事態であると認識した。「ガス爆発の恐れがあるため、絶対に火を使用しないこと。朝食は、パンと牛乳を10階まで階段で運ぶこと。私は、今から病院に向かうこと。」を伝え、大急ぎでパジャマの上から服を着た。出かけようとしていたところ、出勤途中の職員や出勤予定の職員から電話がかかった。各々の状況に合わせ、自宅待機や出勤を指示した。

電車が動いているとは考えられないので、車で出かけた。が、運転に慣れていない上、信号の停止、道路の亀裂、渋滞で一向に進まない。引返し自転車に乗り換えた。自転車に乗っていても余震を感じる。力一杯漕ぎ、もう何時間も走ったと思うのに、まだ明石市である。ようやく須磨（神戸市須磨区）まで来た。毛布を被りうずくまる人、リックサックを背負い放心状態でさ迷う人、倒壊の家を掘り起こし、埋もれた人を助けようとしている人……余りの酷さに目の前の現状を現実と認められない。手を掌せ通り過ぎるしかない。長田、兵庫に来ると、火事は一層激しく、西を見ても東を見ても、前も後ろも、真っ赤な炎と煙である。燃え残った家が倒れてくる。倒れて道が塞がれる前にと、大急ぎで走った。後を振向くとメラメラと崩れ落ちてくる。怖いと言う気持ちはない。芝居にでているようで現実感はない。涙は出ない。もう一息で病院だと力を振り絞って走っていると、老婦人に呼び止められ、煤で真っ黒の顔を拭くようにとタオルを差出された。

病院に着くと昼前であった。栄養管理室の事務所は、書棚が倒れ机が飛び、天井と床のエキスパンションが外れ、寒風が舞っている。調理場は、壁が落ち廊下との境がなくなり、天井から空が見えている。余震で揺れると、天井から小さなセメントが落下する。とても調理ができる状況ではない。

昼食は、家族を放り出しいち早く出勤した栄養士により、在庫の食品などで計画がなされていた。調理員たちは、その対応と水の出る外来棟への水汲みに大奮であった。デイスポ食器に盛り付けをし、リレーにより10階まで運搬した。

午後1時30分栄養管理室の職員が一同に会した。栄養士は出勤予定者の全員が、調理員は16名（予定者20名）が出勤して来ていた。当日出勤者の中には、自宅全半壊者5名、一部損壊者

9名、地震発生前に出勤し、職務を終え帰宅すると、自宅が全壊していた者もあった。被害の大きかった灘区に居住する者もいたが、全員が地震発生と同時に家を出、徒歩で来ていた。栄養管理室の出勤率は院内で最も高く、職員は「いかなることが発生しようとも、患者さんに食事を提供しなければならない。」という使命感を持っている。被害状況を報告しあい、生きていること、怪我のなかったことを涙して喜び合う。しかし、まだ連絡のとれない職員が気に掛かる。職員に、「親族に電話を入れること。夕食は、午後から蒸気釜が使用できるので、塵芥の落下しない場所で調理を行うこと。」などを連絡し、業務に取り掛かる。まず、人員の確保が必要である。外来棟の休養室を宿泊場所として借りる。そして、明日からの対応を打つ。納品可能な食品、在庫の食品を把握し、蒸気釜でご飯を炊く計画をするが、米は17日が納入予定であったため、在庫は2日分程しかない。その他使用できる食品も機器も僅かである。もちろん水はでない。衛生状態は最悪である。とにかく、食べ物が確保できればよしである。献立に合わせて、業務方法と分担を練る。調理場の壁、天井の応急修理を依頼する。夕食を運搬する。などなどを終え、午後9時頃、誰かが買って来てくれたラーメンを食べ一息ついた。この時までは、明日はこの計画に沿って進むものと信じていた。

午後10時頃、「今から蒸気が止まる。」と聞かされ啞然とする。明日のご飯もない。患者さんに出す食べ物がない。相談の結果、すぐに明日18日の3食分のご飯を炊くこととなる。宿泊者全員で200kgの米を臨床研究棟に運び、家庭用の流し台で何回にも分けて洗う。それを持ち帰り、3ヶの蒸気釜で炊く。この時ギックリ腰になってしまう。

数時間仮眠の後、朝6時職務に就く。その日以降、救援物資の依頼・到着した救援物資の降ろし内容の把握、水道・熱源の復旧の情報収集、調理再開の準備、職員の被災状況の把握、調理員の業務割り振り・情報伝達など寝る暇もない日々が続く。

調理場の破損状況から、19日以降については、他大学に救援を依頼することになる。暖かい心のこもった国立大学病院の部課長さんや栄養管理室長さんの顔が浮かび涙が出る。

19日朝、大阪に住む友人が、カセットコンロ、下着、化粧品、常備薬を背負い、手伝うことはないかと駆け付けてくれる。被災している職員も多いため、近くで空きマンションを探して来てくれるよう頼む。運良く、病院のすぐ北側に契約できる。家に帰らず泊まり込んでいると聞き付けた友人より荷物が届く。日用品の他、うがい薬、安全ピン、紙パンツなど各々が本当に心配してくれている様子が痛いほど分かる。2月に入って帰宅した。帰宅とたん連絡が取れず心配した親戚から怒りの電話が入る。すっかり家のことは忘れていた。壊れた山程の食器、倒れた家具は妹家族により全て片付けられていた。愛犬は近所の方々により世話されていた。同じように出勤した家族と連絡が取れたのは、1か月位してからだっただろうか。

もっと他の方法があったかもしれないが、とにかく懸命であった。良かったと思うことは、毎日の出来事を詳細に記録したこと、職員と毎日数回ミーティングを持ち、情報の伝達を細かに行ったことなどであった。

## 食料備蓄とヘリコプター

医事課入院掛主任 湯村 敏行

縦揺れか横揺れかってことですか？ 場所場所で違ったという話ですね。

ええ、私の所は北須磨団地です。ガクガクッという感じでした。タンスの上の人形ケースが足元に落ちていました。もし、枕が反対だったらこんな話も出来なかったでしょう。

隣に寝ていた妻を引き寄せて「大丈夫、大丈夫」って言っていたような記憶もあります。ですから後で地震対策をやりましたよ。止め金具を買ってきましてね。全部止めました。まあ、それもマンションが潰れてしまったら終わりですがね。いや、大げさでなく実際観念しながら寝るってこともありましたよ。

で、妻には「会社は休め。僕は病院に行く」ということで妻のバイクを借りて出て来た訳です。途中、丘の上から長田の火煙が見えました。ガスの臭いがしている通りがかりに「漏れますよっ！」と声を掛けたりしましたね。「オッ！」と思ったのは湊川のトポス（量販店）が崩壊しているのを見た時でしたね。コンクリートの建物が崩壊しているのを見たのはそれが最初でしたから。

入院掛のドアを開けると中はグシャグシャで「これは手が付けられんな」と判断して救急部の受付に回りました。9時前だったのでしょうか。患者は次々と運び込まれていました。大変だったと思いますよ。あの日の当直は。既に急患受付書が束になっていましたから。患者の数も数ですが身元もはっきりしないんですから。ですから後の請求事務は大変でしたねえ。入院掛も大変でしたが外来掛はもっとだったでしょう。

え、食料の買い出しのことですか？ そうそう、それが本題でしたねえ。あれも話したいこれも言っておかないと思うもんだから。いや、自慢話に聞こえたら本意じゃないですよ。みなさんに知っておいて欲しい、備えておいて欲しいと思うもんだから。

いえ、患者さんの食物でなしに、スタッフ用のですよ。10時か11時頃だったのでしょうか、総務課長から「看護部長がDrや看護婦に何か食べさせたい」と、朝飯抜きだったらしいんです。バイクで走りました。途中、職場出入りの牛乳屋さんに会いましてね、100本程配達してくれるように頼みました。店は殆ど開いていなかったからラッキーでした。ですからパンが良からうと判断して、開いていた平野のパン屋で〈そこももう底をつきかけていたんですが〉買ってきました。それだけでは足りないということで、また平野に走って今度はマーケットでカップラーメンやうどんを仕入れました。その時は行列ができていました。都市ガスが止まっていたから携帯用のガスコンロも3台買いました。ボンベは売っていませんでしたから、組合事務所から供出しました。組合の役員をしていて保育所バザーの模擬店とかよくやっていますから。そうそう、保育所の保母さんのお店からプロパンも借りました。お金はいいからと親切に言って頂いています。慈恵団（財団法人）にもお世話になりました。お茶とか缶詰とか、ラーメンとか要るだけ紙に書いておいて持って行けと行って頂いて、売店を2回ほど開けてもらい

ました。

で、救急のDr控室と医事課に食料やコンロを配った後、看護部に行ったんです。看護部長が既に1台で炊いておられて「炊飯器を寄宿舍や近くの看護婦さんから集めているからお米が欲しい」と、いうことで給食掛を訪ねました。「入院患者用のストックもあまり無い、後で返してくれ」との返事です。3袋60キロ借りてきました。

まもなく、看護部長が私を探していると聞いて電話すると「まだ要る」ということで米屋に走りました。給食掛から出入りの店を聞きましてね。50ccバイクの後ろの荷台に2つ、足元に4つ積んで――途中の道は段差が出来ていたり、壊れた家屋が道まで被さっていたり、電線が垂れ下がっていたりそんな状況でした。3つ給食に返して3つを4階の看護部に、エレベーターが止まっていたから担いで。いや、“山”をやってましたからその時はそんな重たく感じなかったですね。しんどかったのはそれからですよ。また、看護部長が来てくれと。3回位はその店の戸を叩いたと思います。最後は夕方ですね。シャッターがおりてたのを開けてもらったんですから。まだお礼にも行ってないんですよ。その時は有り難かったのにねえ。薄情な病院だと思われているかも。ええ、このお話を機会に行かせてもらいますよ。

ああ、何キロ炊いたかってですか？ それは看護部長さんに聞いて下さいよ。今では運んだ数さえはっきりしていなくて、ただ運び役をしたっただけで。

まあ、そういうことですね。食料調達係って話は。ええ、地震当日だけです。明るくなる日からは声が掛からなかったから。配達かなんかしてもらったんじゃないですか。しかし何ですねえ。いざっていうとき病院に食料が無いんですからねえ。食料備蓄ってことは大事なことだと考えさせられましたよ。

それとね、外来ロビーにも避難者が溢れていたでしょ。あの人達にもおにぎりを配りたいと私がお願いしたのか、看護部長がおっしゃたのか良くは覚えてませんが、後で看護部長から「ひとつづつだったけれど配れた」とお聞きしました。うれしかったです。

それとね、これも日が暮れかかかってからのことですが、お茶を沸かしましてね。ロビーのカウンターの上にやかんと紙コップを置きまして「お茶をどうぞ」と。何回も沸かししましたし、紙コップも何回か買いに行きました。これも喜んでもらえたと思いますよ。

それとねえ、あんまりこんな話はしない方がいいかもしれませんが、いやここだけの話ですよ。お金をお貸ししましてねえ、まだ返してもらっていないんですよ。救急受付の時です。「取る物も取らずに来た、タクシーで帰る足代も無い」とおっしゃるのでねえ。いえ、そんな大きい額じゃあないですよ。お二人でした。でもねえ、あれから上沢（神戸市兵庫区）に行く機会があって、一面焼け野原って感じでしょう。ああいうところを見るとねえ、返したくても返せない事情というものがあるんじゃないかとも思いなおしました。

「え、ヘリコプターの話ですか？」それはね、テレビでも「救援用のヘリコプターをもっと増やすべきだ」ってやってましたでしょう。それでね、うちの病院の場合、隣の大倉山グラウンドを救急用の離発着場所に使えるんじゃないかと考えているんです。ええ、私のふたつめの提言ということでこれも是非かなえていただきたいですね。

# 震災を乗り越えて

医事課医療情報処理掛員 濱 口 修

真冬、平成7年1月17日午前5時46分、自宅にて大きな揺れとともに目覚めた。今までになく大きな地震を体感し、天災の恐ろしさが分かったのはその時だった。

真っ先に知人の安否を確認しようとしたが、回線が混雑しており、電話がなかなかつながらなかった。何10回と繰り返した末にやっとつながり、声を聞き安心した。

外は薄暗く、電気は止まり、水まででない。余震も続き、おまけに部屋の中は、物が倒れ無茶苦茶、床も落ちてしまい、こんな大地震は初めてだった。自宅より外の様子を見に山手のほうに出掛けたが、途中、倒壊した建物や傾いた電柱、引き裂かれた道路などが多数あり、火事現場にも出くわした。なんとかしなければならぬと思い必死で走り、生まれて初めて「バケツリレー」で火を消した。

山手から見下ろす市街も、高速道路の陸橋が傾いていたり、あちらこちらで煙りが空に立ち上がっていたり、想像していたより遥かに被害が大きく、私自身生存しているのも信じられなく、命の有り難さを悟った。

9時頃、自宅に戻り勤務先に電話をしてみたが、だれも出勤しておらず、交通面で遮断されているのだなと思い、昼から自家用車で勤務先に向かうことにした。車内より無残な建物が多数見え、「倒壊した家屋に下敷きになっているのでは、なんとかして助け出したい。」と思ったが一人ではどうすることもできず、より一層地震の恐ろしさを感じ、ただ哀れな光景を見送った。

13時頃東灘の自宅を出発して、16時頃病院にやっとのことで到着し、建物が残っていて一安心したが、外は救急車のサイレンが鳴り響き、病院内では負傷した患者が殺到し大パニックに陥っていた。

「医療情報システムの電算機はどうなっているだろう、崩壊していないだろうか。」と思い電算室に向かった。電算機室には、すでに2名の職員が来ており復旧を終えた後だった。

ほっとしているのもつかの間に、救急当直より応援依頼が入り、「ここは一つがんばらなあかんあ。」と気構え救急受付に急いだ。以前、私は救急受付を経験した事がありスムーズに処理をしようと思ったが、まる1日患者の波が押し寄せ、こんな混雑している受付は始めてでした。

当然2人の当直者では手が回るはずがないと思い、次から次へと搬送される患者の身元確認をテキパキと行った。血まみれの患者や無意識の患者、足を引きずっている患者など搬送され職員の人数も少なく、しかたなくタンカで運んだこともあった。又、ある患者には、「応対が悪いぞ。」と言われた事もあったが言われても無理はない。一晩だけで約300人もの患者が収容

され、私自身も気が動転するぐらいの忙しさだった。その上、他の職員から聞いたことだが、敷地内の北側には病棟があり、その手前に中央診療棟がある。ちょうどその境目に亀裂が入っており、救急受付はその間に挟まれていて、いつ余震で倒れてくるか、びくびくしながらでもあった。

そんな恐怖感の中次の日も、相変わらずの患者の殺到で救急部での診療スペースが狭くなり、外来棟で診療するようにもなった。

患者の電算機登録もこの日から開始し、患者の分別を行ったが、大半が氏名不明で、又、同時にカルテを作成したが、どれが誰のカルテであるのか、分からなくなっただけであった。

まる3日間寝ずで頑張り、受付した患者がざっと約450人、今までにない経験をし「自分がこの場にいたから、スムーズに処理が運べたんや。」と心の中で鼻高々な気分にもなった。自分なりに「よう、頑張ったなあ。」「役にたてたかな。」「先に休んですいません。」と思いながら少し休ませてもらった。

私は、この貴重な体験を過ごし、はっきり言って自分一人ではどうすることもできなかった。人と人との協力があつたからこそ現在までの復旧に至ったと思う。

今後このような大地震に備え、食料、衣類品の確保、避難場所の確保等を事前に把握し、対策を考えておく必要がある。「もう、二度とこのような災害で苦しみたくない。」「ここで負けたらあかん。神戸っ子がすたる。」「みんなで生き抜くんや。」と誰もが心の中でつぶやいているに違いない。「もう、二度と来てほしくない。」そう願いたい。

最後に一言、今回の震災で亡くなられた方へ。 安らかに・・・

# 震災と復興の中で

医事課入院掛員 米原武志

震災からはや半年になりますが、今でも悪夢を見ていたような気がします。当時私は、JR六甲道駅の東側の灘区中郷町に母と二人で住んでいました。震度7の激震でしたから、まさにこの世の終りかと思われるぐらいの激しい揺れに叩き起こされました。古い木造住宅は、ひとたまりもなく全壊し、今、生きていることが不思議な気さえしています。何枚もの布団に包まれていたことと家具の倒れ方も幸いたように思います。ちょうど顔の上で家具どうしが、かち合い、そこにわずかながらも隙間が生じたため、窒息を免れました。30分ぐらいで救出されましたが、もし、出火していたらと思うとゾッとします。幸い、母も右腕を骨折しただけで済み、何よりのことでした。

今、あの時を振り返ってみると、自分ではどうすることもできない人間の無力さを感じます。圧死と焼死の恐怖の中で、最初は、このまま死んでいくのかという無念さがこみ上げてきましたが、やがて、今の境遇を冷静に受け留めなくてはいけないと思い、人間は、いつかは死ぬんだからと自分に言い聞かせていました。諦めかけていたわけですが、その時、暗闇の中から母の私を呼ぶ絶叫が聞こえ、生きられる、生きなければならないと強く思いました。

暫くして、近くに住んでいた兄と近所の方が、命がけで助け出してくれました。本当に感謝しています。後で聞きましたが、近所の方も暗闇と不安の中で母から声を掛けられ、大変、勇気づけられたそうです。

平素、無事に平穏な日々が続いている時には、隣近所の存在もつい忘れがちになり、自分には無関係であるとさえ考えていたかもしれません。しかし、今度の震災で隣近所の方々が協力し合ったことが、どれだけ被害を少なくしたかを教えられました。また、ボランティアの人達の献身的な活動にも助けられました。また、在日している韓国の人達が、母国からの救援物資を同じ地区の日本人達へも平等に分配して下さった話も聞きました。その他、いろいろ見るにつけ、聞くにつけ、人は、助け合ってこそ、本当に幸福に生きていけるのだと感じました。自分の身一つでさえ、人の助けがなければ守ることができないこともあるということをお教えられた今度の震災は、生涯忘れてはならない貴重な体験を与えてくれたように思います。

私は、九死に一生を得たわけですが、今、あらためて人間の運命の不思議さを感じずにはおれません。思いがけない避難所での生活、そしてそれも長くは続かず、遠方の親戚のもとへの避難。そして、また、神戸にもどってみると、死亡したとばかり思っていた人と生きて再会することができたかと思うと、その逆の場合もありました。

また、職場のことについて言えば、震災前は、あれほど整理されていたものが、めちゃくちゃに散乱し、一部の部屋は、今でも手がつけられない状態です。また、復旧のため、私の所属

する入院掛も何度か移動し、カルテ室でお世話になっていたこともありました。当直の時にカルテを取りに入るだけでしたが、まさか、そこが事務室になろうとは思ってもかけぬことでした。まして、住む家を失った私にとっては、そこが暫くの間、住居にもなっていたわけですから。その後は、近くの公務員宿舎に入居することができ、不自由とはいえ、ようやく普通の生活にもどることができました。ややもすると、くじけそうになることもありました。あの時、死んでいたのだと思うと、どんなことでも乗り越えていけるように思います。

ところで、今年は、ちょうど戦後50年にあたります。私は、避難所での体験や遠方の親戚を頼らざるを得なくなった状況など、まさに、親や先輩達から聞かされた戦時中の出来事のように思われてなりません。建物が戦前からの古いせいもありましたが、廊下には、白い布をかぶせられた人達（遺体安置所に収容しきれなかったため）、そこに寄り添っている暗く沈みきった人達、泣きやまぬ子供の声、疲労と極寒のため肺炎を併発しかけていたことなど昭和20年当時にタイムスリップし、その時の状況が目には浮かびます。

定年で退職された婦長さんのお話によると、こちらの病院でも、当時地下は、遺体置き場と化し、（今は、ただ大きな楠木を残すのみとなりましたが）夏のため、ひどい悪臭がしてたまらなかったそうです。今の平和な病院の風景からは、想像もつかないことです。

大空襲、大水害、そして今度の大地震、その他数多くの修羅場を経験し、一言では言い尽くせない深い悲しみを乗り越えて、今の病院があるのだと感じました。戦後、どんな困難な状況に出会っても、そのつど、ひるまず、前向きに立ち向かっていった人達の姿をお手本に頑張らなければならないと思います。

最後に、亡くなられた多くの方々（その中には、神戸大学の学生も多数含まれています。）の御冥福をお祈りし、また、これまでいろいろと助けて下さった方々に御礼を申し上げ、筆を置かせていただきます。